

絵画の中 の はきもの

—連載を始めるにあたって—

見一 真理子

私は会社勤めの傍ら絵を描いています。毎年十月に開催される二紀展に100号～130号の大きな油彩画を出品しています。初めて出品した作品は靴職人の父を描いたものでした。背中を丸めて靴を縫う姿で、以後私の作品のテーマとなり、職人シリーズの連作が始まりました。

靴屋の娘である私は、父の打つ金槌の音と皮革の匂いの中で育ちました。父の足下に散らばる革の切れ端を拾い集めては、ままごと遊びをしていたように記憶しています。

そんな空気のように当たり前的情景が、特別な存在に変わったのは、或る日店を取材させてくれと訪れた女流画家の作品を美術館で見た時からでした。

大きなキャンバスの中に描かれたミシンや道具類は確かにいつもの見慣れたものばかりでしたが、そこには不思議な異空間として描かれていたことに衝撃を受けました。それは嫉妬にも似た驚きで、改めて自分の周りを見渡すと、今まで気付かなかったオブジェたちが仕事場のあちこちから浮かび上がってきたのです。

皮を貼り重ねた古い木型やジャコメッティの彫塑のような台金のフォルム、そして面と向かって見つめたことのなかった父の顔。徐々にモチーフとして靴職人の父

を描いてみたいという気持ちが強くなり、『靴』と『絵』が繋がり始めたのです。

私は三年前に長年モデルを務めてくれた父を失い、それ以降は作品から靴職人の父が消えています。『靴』というキーワードでご縁を結んでいただいた靴業界の方達は、靴から気持ちが離れていったそんな私を歯痒く寂しい想いで見ておられたのだろうと思います。

靴を愛し、靴作りに誇りを持って私を厳しく激励してくださった言葉が、『靴』を想うこの場所に再び引き戻してくれたものと感じ、この連載をきっかけに私なりに『靴』との関わりを今一度深めていきたいと気持ちを新たにしています。



子供の木型